

わび・さび（芭蕉） VS いき・伊達（其角） 金澤 健

哲学者の九鬼周造は、「それぞれの文化には、その文化固有の美意識がある」と言っています（『いきの構造』）。彼によると、日本文化に固有の美意識に於いては、「わび、さび」も極めて重要な要素であるが、それに劣らぬぐらい「いき」も重要であり、「いき」の中心的な要素には「いなせ」や「伊達」に通じる気概があるのだそうです。

「いき」とは何か、九鬼の哲学者特有の難解な言説を私なりに平明に解釈しますと、例えば、異性を意識しつつも（媚態）も、それに捕われまいとの意気地を持ち、恬淡とした態度を保つということです。人が、仕草や振る舞い、或は芸術作品を作るに当たって、前述したような態度を取ることで、他者はそこに「いき」という美を感じ取ります。その創作態度には、自ずと「遊び心」（自分自身で楽しむ心の余裕）も生まれ、鑑賞者は作品に対して「いき」の美を味わうわけです。

俳句（俳諧）文芸に於いて、「わび、さび」と言えば、芭蕉です。「わび、さび」という美意識を俳諧という形で表現し、日本人だけでなく世界の人々に認められ、作品が愛唱されています。一方、「いき、伊達」というもう一つの、日本固有の美意識を俳句（俳諧）で表現した俳人が、芭蕉の一番身近なところにいた、芭蕉門の高弟、榎本其角です。許六によれば、芭蕉は「自分の作風は閑寂を特質とし、其角の作風は伊達を特質とするが、どちらも得難い特質である」と言っていたそうです。

きられたる夢はまことか蚤の跡 其角

この句は、蚤にかまれた跡を、夢の中で斬られた跡だと大袈裟に言っているものですが、芭蕉は閑寂と伊達のどちらも認めるという基本認識があるので、ふざけた句だとか、作り上げた世界を詠んでいるにすぎないといって排斥したりしていません。軽妙洒脱や架空の世界を決して否定せず、俳諧文芸の重要な特質と認めて、むしろ、伊達風として高く評価しています。其角の「遊び心をも

ってあやふき所に遊ぶ、という作句姿勢に理解を示しています。一月号で中西進氏の言葉として紹介したように、芭蕉も、“虚の世界にあそぶことこそ日本詩歌の伝統、であると捉えていたからに違いありません。

しかしながら、芭蕉は禅の教えに傾倒し、わび、さび、しおりにあこがれるような人柄ですので、其角のように“遊び心をもって浮世を洒落のめす、ような句を作るのは得意ではなかったのではないのでしょうか。芭蕉は、“わび、さび、の美しさを感じ、表現する天才だったのでしょうが、其角のように、遊び心をもって事象に対し、そこに滑稽美を発見し、それを平明に表現することは苦手だったように思います。“わび、さび、は自分に任せてくれ。その代り“いき、伊達、は其角に任せるぐらいの心つもりだったのかもしれませんが。そう考えると、前述の芭蕉が許六に対して発した言葉も腑に落ちて来ます。

まとめとして私が強く主張したいのは、“わび、さび、も“いき、伊達、も、世界に対し誇るべき日本固有の美意識であり、俳句においてこの二つの美意識を高らかに詠い上げ、その良さを日本だけでなく、世界の人々にも理解してもらえるよう切磋琢磨すべきだということです。どちらも俳句の重要な要素であることを強く訴え、最後に其角の句をいくつかご紹介して本稿を終えたいと思います。

我が雪とおもへば軽し笠のうへ
十五から酒をのみ出てけふの月
草の戸に我は蓼くふ蚩かな
声かれて猿の齒しろし岑の月